

新刊紹介 北 克一

湯浅 俊彦編著

『電子出版と電子図書館の最前線を創り出すー立命館大学文学部湯浅ゼミの挑戦』

出版メディアパル, 2015, 3

270p 21cm 定価 2,400 円(税別)

ISBN:978-4-902251-79-1

本書は 2014 年度の立命館大学文学部湯浅ゼミの 1 年間の成果記録である。同ゼミでは、「電子書籍を活用した大学ゼミ教育の高度化」をテーマに立命館大学内の「教育の質向上予算」を獲得し、2013 年度には、電子学術書実証実験としてゼミ生にタブレット端末を配布し、授業、ワークショップ、フィールドワーク調査などを行ってきた。その成果報告は、前著『デジタル環境下における出版ビジネスと図書館ードキュメント「立命館大学文学部湯浅ゼミ」』(出版メディアパル, 2014.4)として刊行されている。

同じく 2014 年度には「実際に大学として電子学術書の利用契約を行い、ゼミ授業の高度化を図りながら」(p.2)、年度のテーマ「電子出版と電子図書館ー競合から共存へー」を設定している。

本書は次の 4 章で構成されている。若干引用が多くなるが、本書の特異な編集状況を示すため、節部分まで、引用をする。

まえがき

第1章 電子出版・電子図書館は知識情報基盤を変える

第1節 電子出版・電子図書館に未来をデザインするー最前線を創り出すことの重要性

第2節 大学図書館における電子書籍の取組み

第2章 電子学術書を活用した大学教育の最前線

第1節 BookLooper を利用した大学教育の可能性

第2節 Springer における eBook の歴史、しくみ、利用の実際

第3章 ゼミ生が探究する電子出版と電子図書館

第1節 電子書籍における「版」の考察

第2節 電子書籍とペーパーライクーな電子書籍は紙の形から離れないのかー

第3節 特別支援教育におけるデジタル教科

書・電子書籍の可能性

第4節 小・中学校におけるタブレット型端末を用いた読書活動

第5節 デジタル教科書が変える学校教育

第6節 日本語学習におけるデジタル教材の有効性

第7節 公共図書館における電子書籍を活用した多文化サービス

第8節 デジタル時代の学校図書館

第9節 電子コミックの収集ー新たなアーカイブの構築ー

第10節 電子図書館における「貴重書」

第11節 電子書店とディスカバビリティ

第12節 リアル書店における電子書籍販売

第13節 電子出版時代における雑誌の新展開

第14節 電子書籍としての自費出版

第4章 電子出版・電子図書館

第1節 国立国会図書館・東京本館

第2節 講談社本社

第3節 図書館流通センター本社

第4節 上智大学文学部 柴野ゼミ生との交流あとがき

第1章は本書全体の「概論」にあたる。冒頭の第1節を本書の編著者であり、プロジェクト全体の企画、推進者である湯浅氏が執筆している。短い文章であるが、電子出版・電子図書館に対する同氏の現状認識と知見が示されている。

なお、文中にゼミ授業で使用した電子教科書と電子参考書が示されている(p.9)

教科書：『電子出版学入門 改訂 3 版』2013.3.

参考書：『公共図書館の論点整理』2008.2.

『インターネット時代の学校図書館』2003.2.

『デジタル書物学事始め』2010.9.

『情報の倫理学』2003.9.

『学術情報と知的著作権』2002.5.

(出版年月は、評者の補いである。)

一覧にして見ると明白のように、教科書に指定された湯浅氏自身の著作を除いては、本プロジェクト開始の 2014 年 4 月時点からすれば、多くは 10 年近く前に執筆されたものである。この 10 年間のインターネットの進展と情報のデジタルへの収束及び Things to Web の浸透やモバイル環境の発展を顧みれば、学習の出発点ともなるであろう参考書が、一

昔前の執筆のものであるのはいかなるものであろうか。

なお、教科書、参考書の選定事由は示されていないが、第 2 章第 1 節で報告されているシステム BookLooper の提供コンテンツ制約によるものであろうか。

また、第 2 節は立命館大学図書館からの 2013 年度「大学図書館電子学術書共同利用実験(8 大学)」を中心とした報告である。

第 2 章第 1 節は電子書籍システム BookLooper を提供する事業者側(京セラ丸善システムインテグレイト)、第 2 節は学術出版社 Springer 社からの電子書籍、電子ジャーナルの歴史、裏舞台、現状認識類国である。提供者側の一つの識見として興味深い。

第 3 章が本書の中でも特異な章である。全部で 14 節もあるが、これは湯浅ゼミ 3 回生演習に参加した 14 名に対応している。すなわち 14 名の学生は個々に、全体テーマ「電子出版と電子図書館一競合から共存へ」の元に自己の知的好奇心をサブテーマとして設定し、その「研究成果」をまとめたものがある。

個々に取り上げるゆとりはないが、章の冒頭では「多様で重層的なテーマを自ら設定し、文献調査だけにとどまらず、積極的にインタビュー調査に取り組み、フィールドワークに努めた」、と紹介されており、うなずける。

全体を概覧するとインターネット情報資源のみを参照するのではなく、意外に図書、雑誌等も参照しており、バランスはよい。ただし、個々のテーマでは、現行法規の改正以前のものを根拠に検討が進められていたりしている。

一例をあげておけば、第 4 節では平成 26 年 6 月改正の学校図書館法が参照されているのに対して(p.108)、第 8 節(p.168)では、平成 20 年 10 月 22 日開催の「子どもの読書サポーターズ会議 第 10 回」の資料が参照されており、明らかに平成 26 年の学校図書館法改正前の条文に依拠している。なお、同資料は文部科学省のトップページでサイト内検索をキーワード「学校司書」で行えば冒頭に表示される。

指導教員 1 名に対して 14 名の学生が個々のサブテーマを設定するのであるから、相当な教育負荷と拝察するが、一層のご指導をお願いしておきたい。

第 4 章は、ゼミでのフィールドワークの報告である。4 つの節は個々に独立しているので、興味のあるところから読み進めればよい。

本書全体を通して、プロジェクト遂行者である湯浅氏のアグレッシブな活動と電子出版、電子書籍に対する熱い情熱が伝わってくる書物である。

原著『デジタル環境下における出版ビジネスと図書館—ドキュメント「立命館大学文学部湯浅ゼミ」』(出版メディアパル, 2014.4)と共に多くの方に、ご一読をお勧めしたい。

なお、この新刊紹介を記した 2015 年 3 月 20 日、楽天がオーバードライブ社を全面買収するとの報道が流れた。新しい情報環境プラットフォームの登場が予感される。

(きた かついち 相愛大学共通教育センター)